

株式会社ネットワーク应用通信研究所 フェロー

まつもとゆきひろ

Yukihiko Matsumoto

古代からの文化を残し、茶道の伝統も色濃い地方の文化都市・島根県松江市。ここで仕事をし、妻と四人の子供との堅実な生活を営みながら、世界で自由に使われているオープンソフト「Ruby」の開発者として活躍する人物がまつもとゆきひろ氏である。ネットワークが世界に張り巡らされた時代、発想と技術力があれば地方都市から世界に発信できることを身をもって示しているまつもと氏に、Rubyの成り立ちから地方で暮らす意義、現在の問題意識などをうかがった。

地方都市から世界に発信できると

不況でできた時間が生んだ「Ruby」

——世界中で利用されているRuby。無償で誰もが自由に使えるソフトウェアは何万とあるのですが、非常に利用度が高く注目されているソフトウェアが地方都市の松江市から発信されているのは注目すべきことです。まず、Rubyを開発されたきっかけから教えてください。

まつもと 大学卒業後、ソフトウェア開発会社に勤めていた九三年頃、経済状況が悪くて仕事が暇になったことがあります。それから自分で何か作ってみようと思いましたが、たくさんのデータの中から意味があるものを抜き出したり集計したりという作業は、仕事や日常生活の中でたくさんあります。

たとえば給与計算などです。そういう細々とした仕事をコンピュータでやるとき、事務系の方はマイクロスフットのエクセルなどを使うでしょうが、プログラマーは大抵そういうオフィスツールを使うのは得意じゃない。それならもっと使いやすいものを、と考えたツールがRubyです。

——仕事として生まれたものではなく、いわば趣味だったんですね。

まつもと そうです。だからたくさんの人に使ってもらおうということも想定していませんでした。自分で作るのが楽しくて、使えば便利だし、それでいいや、と。自分や同僚たちだけで使っていたの

ですが、そこそこ出来もよかったので、それならインターネット上で無償公開しようかと考えました。それが九五年のことです。そうすると思ったよりも評判がよくて、海外の方も含めてたくさんの人たちに使っていただいて、現在に至っています。九九年にはRubyに関する最初の本を出しましたが、技術系の本としては一万余千部売れるという大ヒット。そのうち海外で、Rubyに関する本を英語で出していたら、それも評判になりました。

——それでもまだ「知る人ぞ知る」という状況だったのでは？

まつもと そうですね。それがぐっと広がったのは、〇四年に出た「Ruby on Rails」という名前のウェブアプリケーション

フレームワークがきっかけです。今、ウェブサイトでホテルの予約をしたり、買い物をしたりする方はたくさんいますけれど、手元のコンピュータの画面上で操作しますよね。ところが実際の処理はインターネットの向こうにあるコンピュータがやっついて、処理をまた返してくるという仕組みになっています。そういうものをウェブアプリケーションといいます。わりと固定的な構造で、共通部分が多い。その共通部分をまとめた枠組みとして提供しているのがウェブアプリケーションフレームワークで、「Ruby on Rails」もそのひとつです。Rubyを使っていて、デンマーク人エンジニアが開発したもので、非常に使いやすいと評判がよいんです。これを

利用する人たちもまた、自分の目的

に合わせ、Rubyを使ってホテルの予約サイトや買い物サイトを作ったりしているわけです。

——それでRubyを使う方が世界中で飛躍的に増えていったわけですね。

仕事に必要なのは数学よりも国語の能力

——優れたツールであるRubyを開発されたまつもとさんですが、実は子供のころは数学より国語の方がずっとお得意だったとか。

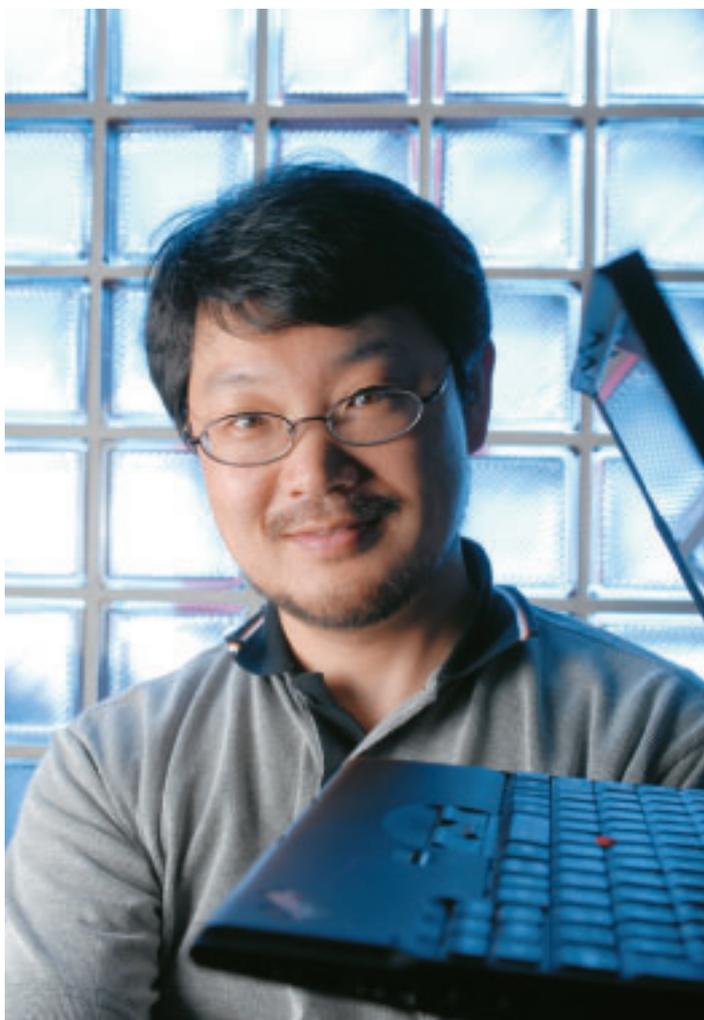
まつもと 本が大好きで、うちの近所にある本屋さんに入り浸っていました。友達が本屋さんの方を僕の自宅だと思いこんでいたほど(笑)。数学の成績だつてよくなかったんです。それでもこういう仕事ができるのは不思議だと思われるかもしれませんが、僕のような仕事をしている人間に必要なのはむしろ言語能力とかコミュニケーション能力なのです。

給与計算をしたいと思っても、「給与計算をしてね」とコンピュータに話しかけてもやってくれません。コンピュータの中に入っていない

まつもと 世界中にプログラミング言語は何万もあると思いますが、その中で非常に話題になっている、有名であるというところは確かだと思っています。

るチップは0と1しか認識できませんから。そこで仲立ちが必要となります。給与の計算をどうするかということコンピュータにどうやって教えるか。コンピュータは「001100」みたいな数字の羅列を判断して動くわけですが、人間がそういう羅列を作っていくのはほぼ不可能なんです。それなら両方が妥協するしかない。人間はもう少しコンピュータが理解しやすいようなプログラムを書く。コンピュータも本来は0と1でしか伝えられないところを、人間がわかる程度に直して表現する。そういう折り合いをつけるのがプログラミング言語とっていいだけばいい。

そのプログラミング言語を作るためには、コンピュータの知識よ



り、「人間がコンピュータに伝えたい処理をどう表現するのか」という点が重要になってきます。それは数学でも何でもない。心理学とか人間工学など、人のことを深く理解する分野の能力や知識が絶対に必要なのです。僕はモノを書いたり読んだりすることが子供のころから好きで、それがRubyの開発に、大いに役立っていると思います。

——人間が使いやすく、コンピュータも理解しやすい。その点

が評価されて、これほど世界で使われるようになったといえますね。無償で公開したオープンソースですから、その点でも使いやすい。

まつもと 使われた理由はほかにもあります。プログラミング言語を作るときには、製作者なりの理念があるものです。それを使うプログラマーも人間だから、どうしたって間違いをするわけです。それを見越して間違いを少なくするように、人間ができる幅を最初か

取材中もパソコンを手放さず、常に画面と向き合いながらメールなどを処理していく。世界中から大量に届くメールに返信しつつ、インタビューにも的確な答えを返す姿が印象的だった。



まつもと・ゆきひろ ● 1965年大阪府生まれ。幼少期から鳥取県米子市で育つ。筑波大学第三学群情報学類を卒業し、現在は島根県松江市に住み、同市にある株式会社ネットワーク応用通信研究所 (NaCI) にてフェローとして勤務している。また、合同会社Rubyアソシエーション理事長を務め、2007年6月より楽天株式会社技術研究所フェローも兼務。著書に『オブジェクト指向スクリプト言語 Ruby』『Ruby デスクトップリファレンス』『Ruby レシピブック 268の技』『Code Reading—オープンソースから学ぶソフトウェア開発技法』『ビューティフルコード』など。ブログは「Matzにつき」。

心身のバランスがとれる地方の生活

「実は私は、数年前まで弊行の松江支店長を務めておりました。そのとき松江の文化・風土・人情に触れて、本当に楽しい時間を過ごしました。ですからまつもとさんがこの土地に住み、根づいて、世界に通じる仕事をしてい

てもらえばいい」という自由な姿勢に立ったものなんです。ツールの特性として自由であり、使うときも無償である。改良して再配布することも自由というところが、世界の人たちから支持されている理由だと思っています。

らっしゃることに感銘を受けています。

まつもと 会社は松江駅からも近い所にあります。自宅は数キロ離れた玉造たまつくりにあります。夜七時には帰宅して、家族と一緒にゆつくりと過ごします。と言っても、僕

の仕事は会社にいないとできないというものではないので、コンピュータに向かっててこそ、そしていたりするのですけれども、東京で仕事をしている人に比べればはるかにゆつたりと過ごしていると思います。

——お子さんが四人いらつしやるかと。
まつもと 僕だけじゃないんですよ。うちの会社の松江オフィスには子供四人というのが社長を含めて三人います。三人子供がいるという社員も多いですね。これは東京オフィスとは格段の違いです。既婚者率が高く、子供も多い。東京だと子供がいても一人とかせいぜい二人ですから。やはり環境の違いが大きいですね。

——私も松江時代は歩いてゆつたり通勤していましたが、今はラッシュの車内でもまねながら……(笑)。

——会社経営者の方から見れば、コスト面などでのメリットもあるのでしょうか。
まつもと IT関係の場合は人件費がコストのかなりの割合を占めますが、当社の社長は「安上がりだから地方です」という選択はあまりよくないと考えています。当社の場合、東京の社員には都会手当をつけますが、それ以外の給与水準は変わらない。あくまでも仕事の内容に対して差をつけるのであって、勤務地は関係ないと思います。今は都会でも人を安く雇えますので、経営的にはむしろ都会でやった方がいいかもしれません。でもそれは逆に言うと、個人が安い給料でやりくりしながらやっているだけのこと。ある種、搾取の構造です。それをよしとしていると、長い目で見れば結構大変なことになるのではないのでしょうか。

まつもと そうでしょうか。私も基本的には松江にいてできる仕事をしているわけですが、どうしても相手と対面しなければならぬ打ち合わせもあつて、週に一回はどこか出張です。でも松江

——今はネットワークが発達して、地方にいても格段に仕事がしやすくなりました。仕事さえあ

ればワーク&ライフのバランスがとれる地方に住みたいという方はどんどん増えていくのではないのでしょうか。

まつもと 地方にいながら成功しようと思えば、大切なのは他との違いを打ち出すこと、「差別化」です。当社にはいくつかこだわりがあります。一二年前からずっと無償で公開するリナックスなどのソフトウェアを使った仕事を中心

理系の人材にもっと高い評価がほしい

にしてきたという実績がありません。しかもそれらを使うユーザーとしてだけではなく、Rubyの開発者である僕も内部に抱えていて、自分の会社からオープンソースを提供する立場でもあります。これだけオープンソースの分野で長く実績を残している会社は日本中でもそれほど多くない。その「差別化」が売りになっているのでしよう。

——心身にゆとりを持ちながらお仕事ができるのは素晴らしいことです。世界的な名声を勝ち取ったまつもとさんは若い技術者たちのあこがれの存在になられたと思いますが、後に続く人たちにどういったメッセージを伝えたいとお考えですか。

まつもと 日本では技術的なことだけをやっていて大きな報酬を得たという例がありません。技術系の人間は「安い給料でも好きなことをやっていてなんとか暮らせるのだから、まあいいや」と考えがちです。でも、若い人から

見て、技術で経済的な成功を収めたというロールモデルが身近になんていうのは、それはそれでよくないと思うのです。僕自身、プログラマーのまま、マネージャーや経営者の立場に進まなくても社会的に成功できるんだ、オープンソースをやっても食い詰めなくて済むんだということを示したいと思っています。正直、ちょっと恥ずかしいところはあるんですけど。日本のこれまでの発展を支え、世界に発信してきたのは技術系の人間の力に負うところが大きいはずなのに、何かの統計で文系



背後に松江城を仰いで。緑の豊かさに心が和む。

に比べて理系の人の生涯賃金が相対的に低いと示されたりするのを見ると、非常に切ない気持ちになりますね。優秀な人材が海外に流出するのでもそういう理由が大きいのではないのでしょうか。子供たちに夢を与えるためにも、なんとかしなければなりません。

——島根には古代からのさまざまな文化が残っています。世界の方々に見てもらいたいところがたくさんあります。

まつもと 実は今年九月(注)、松江市にある「くにびきメッセ」を会場として、Rubyを使って人を対象とする「Rubyワールドカンファレンス」を開催します。幸い島根県や松江市からご後援をいただいたので、参加費は無

料。世界中から参加者がやってくる予定です。講演者としても世界的に有名な方々をお招きしているのですが、お願いすると「イエス」とおっしゃってくださる確率は非常に高かったですね。日本の中で、島根に来るのがどれだけ大変かを理解していないのかもしれませんが(笑)。多くの参加者には「まつもとが住んでいる町を見てみよう」というツアー感覚もあるらしいです。

——外国人にとって絶対に楽しい町だと思います。文化、風景、食べ物。出雲大社にもぜひ行ってほしいですね。

まつもと 日本の特異な文化を見ていただけるいい機会です。二日間で六〇〇人が集まる予定なので、島根県としては大イベントですね。これを東京でやると何千人もの人が集まるかもしれない。でも、そういうイベントを松江市でやるというのが意味のあることだと思っています。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。ごうございました。

聞き手/日本銀行情報サービス局長

河野圭志

(注) このインタビューは2009年6月に行いました。